

ZOCALO²⁰²¹ 10 ▶ 11

ZOCALO = ソカロは
メキシコの都市の広
場を意味するスペイ
ン語。埼玉県立近代
美術館はアートを通
じて交流する市民の
広場をめざしています。

大・タイガー立石展 世界を描きつくせ!

2021年11月16日(火) ~ 2022年1月16日(日)

2会場
同時開催

埼玉県立近代美術館 + うらわ美術館
The Museum of Modern Art, Saitama URAWA ART MUSEUM



TIGER TATEISHI

11月16日(火)に「大・タイガー立石展 世界を描きつくせ!」が開幕します。油彩画・漫画・イラストレーション・絵本・陶彫・・・と多ジャンルにわたって活躍したタイガー立石(本名・立石紘一/1941-1998)の魅力を、うらわ美術館との同時開催で余すことなくご紹介します。

ここではタイガー立石について5つのキーワードをもとに、うらわ美術館の滝口明子学芸員、当館平野到学芸員に語ってもらいました。

トラの魅力

平野学芸員(以下H): タイガー立石は、全体像を論理的に捉えるのが極めて難しいタイプの作家です。実はそこに最大の魅力が秘められているのですが、まずは作家のどういうところに惹かれ、興味を持ったか伺えますか?

滝口学芸員(以下T): 私の場合は、漫画のシャープさや、万国に通じそうなセンスに魅力を感じました。「氾濫するイメージ 反芸術以後の印刷メディアと美術 1960's-70's」展(うらわ美術館開催、2008年)の調査で、彼の漫画の全貌を深く知ることになったのですが、その時に立石の自費出版の第一作目を初めて目にし、スマートで海外っぽいナンセンスに驚きました。その驚きがいまでも続いているという感じです。

H: シャープさというのは内容の面ででしょうか、それとも表現におけるものでしょうか?

T: 表現ですね。例えば、同じく「氾濫するイメージ」展で紹介した赤瀬川原平の漫画原画も、描線などが非常に美しいのですが、立石は、赤瀬川とは異なるタイプの洗練さがあり、構成やレイアウトが卓越しています。

H: 私は、1980年代末に村松画廊で60年代の作品を見た時は、あくまで60年代のローカルな日本の美術史に位置づけられる作家だなという認識があった程度でした。当館で仕事をするようになり、70年代のイタリアでの活動を初めて知りました。ローカルな作家がなぜイタリアで、国際的画商のイオラスや、ラジカルな建築・デザイン運動の中核にいたソットサスやメンディーニという人々に受け入れられて、彼らと仕事を協働できたのかというところに強い関心を抱きました。カウンターカルチャー以降、世界的に共有された美意識や思想があるなかで、日本のローカルな表現を世界でどう位置付けるかと考えた時、非常に重要な作家であると気づいたのが興味を抱いたきっかけです。

トラの時空間

H: 立石の表現における最大の特徴は時間や空間の自在な解釈にあります。漫画や絵本、コマ割り絵画に見られる時空間の表現についてどう思われますか?

T: まず、時空間への興味の根源にあるのは、子供時代に田川で見た映画ではないでしょうか。立石と同世代の方は、映画、特にディズニーの体験はすごく強烈だったと聞きます。当時、手塚治虫の作品が掲載されていた『漫画少年』がよく読まれていたことも考えると、視覚上の時空間の表現、更にその後のSFへの関心は、立石にとっては自然なことのように思います。

H: 漫画や絵本において時空間はとても重要な要素ですね。

T: 漫画における時空間に関しては、手塚治虫をはじめとする戦後直後から活躍していた作家たちにより革新が進められました。立石の敬愛する杉浦茂も、非常に面白い時空間の表現を手掛けています。当時の漫画家は、1ページ、1コマの中で時空間をいかに効率よく表現するか、皆考えていました。

H: 同時代に注目された時空間の理論として位相幾何学が挙げられますが、当時の作家たちの多くは、関根伸夫も含め、位相幾何学に関心をもっていました。勿論こうした同時代性も考えられますが、立石の場合はいかに時空間を面白く描くか、ということにすべてのモチーフと物語が捧げられているように感じます。つまり時空間そのものの変容を2次元に魅力的に表すために、モチーフや物語が活用し尽くされているような気がしますね。

トラの反復

H: 立石は同じモチーフを何度も反復し、繰り返し描き直しています。モチーフを何度も繰り返し描くことについては、どのように捉えていますか?

T: 立石はすごい仕事量をこなしていた人だったので、本人の頭の中ではあらゆる作品がつながっていたのかもしれませんが、作品を並べてみると、実はひとつの大きなコマ割り絵画になるのでは?などと想像してしまいます。

H: 立石はモチーフを繰り返し描くことで、自分の表現を何度も客観的に捉え直しているように見えます。その姿勢はマン・レイにも通じるように思いますが、描いた作品から距離を置いて、もう一度外側から見て描き直すことで新しい意味を見出していたのではないのでしょうか。例えば60年代から描き続けているモチーフの虎も、ルネ・マグリットの『白紙委任状』のようにトリッキーに描かれる場合もあれば、動きの表現の対象としても様々な用いられてもいます。虎は表現のヒントを与えるモチーフとして、造形的な意味で加工しやすいイメージだったのかもしれませんが、こういったモチーフに対する姿勢は、立石も関心があったピカソに近いとも言えます。モチーフにひとたび興味を抱くと、そのモチーフの変形、解体、融合を重ねていく…。この点は、立石とピカソに共通している特徴です。

T: 漫画では、キャラクターが繰り返し登場するスター・システム制があります。手塚治虫がハリウッド映画を参考にし取り入れたもので、例えばある作品の主人公が別の作品では悪役として出てくる、といったことを指します。もしかすると立石の作品にもスター・システム制の面が



あるかもしれません。富士山などもスター・システムのように様々な形で現れます。立石が、絵画や漫画という異なるジャンルを軽やかに横断していたことがよく表れている特徴だと思います。

トラの造形力

T: 作品の特質として、筆触は出来るだけ消してはいるものの、わざと手塗り感を残したような60年代の油彩画と、手仕事感が全く窺えないシャープな描線で構成された漫画のギャップがとても印象的です。異なるジャンルを見事に使い分けて制作していた画家だと思います。これが意識的な使い分けだったのか気になりますが、どう思われますか?

H: かなりいろいろな手法で描くことができた作家です。イタリア時代のイラストレーションに関しても、他のジャンルの仕事には見られないような描き方をしているものもあります。言い換えると、自分の特定のスタイルにこだわっていないし、自己の表現に没入しすぎていない。描くことと自分との間に、程よく距離をとったタイプの作家だったのではと思います。

T: イタリアで立石が受け入れられた理由はそこかもしれないですね。自分のキャラクターを打ち出しつつ、プロとして器用にこなすことが重視される国なので、立石のバランス感覚の良さは評価されたと思います。

H: 立石はかなり高い画力を持ちながらも、表現主義的な演出はしていません。けれど描かれたものにまったく血が通っていないわけでもない。独特の表現だと思います。

T: 《とらのゆめ》はまさにそうだと思います。クールだけれど、暖かみもある作品です。

H: 色彩の面ではどうでしょうか?

T: 立石の世代は、映画やディズニーのアニメーションなどで総天然色に対する衝撃を受けたと聞きます。そうした経験から極彩色の表現が生まれているのかとも思います。個人的には、60年代の色彩感覚は共感しがたい部分もあります。《とらのゆめ》の色彩調和の美しさによって、初めて立石の色彩感覚と向き合えたような気がします。

H: 確かに、60年代の色彩表現には時代的な関連性があるかもしれませんね。その後のイタリア時代は、より多くの色を使って過激なまでに豊穡な色彩表現になっていきます。アイデアノートにはイタリアの雑誌で色彩的に気になった誌面の切り抜きが貼ってあります。アジア的でもなく、ヨーロッパ的でもない、どこか無国籍な色彩表現を見つけていこうとしたのかもしれませんが、80年代には青を基調とした色彩表現が見られますし、時代によって変化していますね。

トラの横断

T: 立石の幅広いジャンルの横断については、その背景に時空間の表現の追求があると考えています。その時その時で、自分がどう時空間を表現したいか。その折り合いを、ジャンルによってつけていたのではないのでしょうか。イタリアではいったんコマ割り絵画に集中しています。やはりイタリアでは彫刻なり油彩画なりを制作することが重視されますから。帰国後の絵本作業に関しては、ページ繰りで生まれる時間の流れが、新鮮だったからこそ挑戦したのだと思います。

H: 立石はとにかく目で触れたものすべてを受け入れる志向を持っていたのだと思います。この作家にとって、イメージは全て等価に存在していたのでしょう。対象やジャンルに優劣をつけず、自己と他者の表現にも差異を設けず、それらを引用、解体、再編しながら、すべてをシームレスに繋げていった。そこがもう一つの大きな特徴かなと思っています。絵巻物の大作《水の巻》には、この特徴がよく表れています。そして、ジャンルを越えて膨大な量の作品を制作しました。この仕事量の多さも、この作家ならではのと言えます。

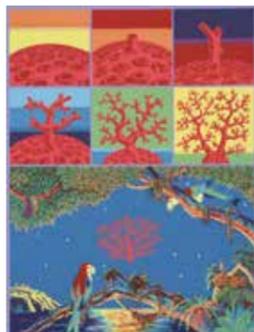
T: この仕事量の膨大さと幅広さを2館で同時開催することによって、体感していただけたと思います。

H: 埼玉県立近代美術館では、立石の画業を辿れるように概ね通史的な構成をとります。当館ではこれまでイタリア時代の作品を収集してきた経緯があるので、特にその時期については、資料なども交えてご紹介します。

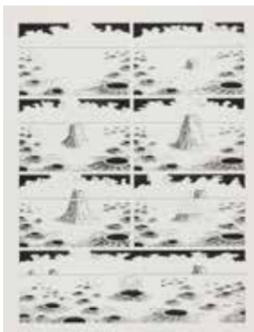
T: うらわ美術館では、「本とアート」をテーマにしている美術館として、漫画と絵本に力を入れて展示を構成します。これまでの会場では展示されていない漫画や絵本を数多く出品し、絵画と、漫画・絵本のつながりをきちんと提示したいと思っています。例えば、1980年代初めに思索社が企画した漫画全集は、ナンセンス漫画の復権が意図された大変素晴らしいものです。タイガー立石の姿をA面・B面のように異なるアプローチで紹介するので、ぜひ両会場併せてお楽しみ頂けたらと思います。(聞き手・編集:K.M.)

※図版キャプション MOMAS:埼玉県立近代美術館展示作品
UAM :うらわ美術館展示作品

- 1 《立石紘一のような》1964年、高松市美術館蔵 | MOMAS
- 2 《Coral Moon》1978年、うらわ美術館蔵、埼玉県立近代美術館蔵 | MOMAS+UAM
- 3 《月面の生成》原画、1982年、提供・ANOMALY | UAM
- 4 『とらのゆめ』原画、1984年、個人蔵 | UAM
- 5 《祝祭としての惑星: 瞑想にふけるための建物》(エッセイ・ソットサス/原画:タイガー立石)、1972年、埼玉県立近代美術館蔵 | MOMAS
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2021 E4369



2



3



4



5